

資料編 明治前期における秩父地方の生産基盤

著者	稲村 太郎
雑誌名	歴史地理学調査報告
号	7
ページ	163-173
発行年	1996-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/105406

明治前期における秩父地方の生産基盤

稲村 太郎

はじめに

本報告は、明治前期における秩父地方の生産基盤の地域的特徴を統計資料により検討するものである。安政開港以後の輸出向生糸の生産増大にともない、秩父の村々の生産基盤にしめる繭・生糸生産の比重はますます高まった。しかながら、明治14年からの松方財政下における種々のデフレ政策は秩父の生糸生産農家に大きな打撃を与え、それは明治17年の秩父事件にむすびつく一因ともいわれている。ここでは、まず、郡単位のデータから秩父郡の位置づけを考慮しながら、郡内の地域構造を考察する手がかりとしたい。

以下で用いたデータは主として下記の資料によった。

- 1) 明治17年埼玉県統計書、同年群馬県統計書
- 2) 明治20年町村編成区域表¹⁾
- 3) 武蔵国郡村誌(明治9年)
- 4) 木公堂日記²⁾

図表一覧：

- 第1図 埼玉県および群馬県の郡別養蚕戸数率
- 第2図 秩父郡村名一覧
- 第3図 秩父郡内各村の人口密度
- 第4図 秩父郡内各村の耕地比率
- 第5図 秩父郡内各村の耕地面積に占める田地比率
- 第6図 秩父郡内各村の一人あたりの耕地面積図
- 第7図 秩父郡内各村の繭生産量
- 第8図 秩父郡内各村の糸生産量
- 第9図 秩父郡内各村の絹織物生産量
- 第10図 木公堂日記にみる価格変動
- 第1表 明治17年における埼玉県および群馬県の小作人率および小作地率
- 第2表 明治17年埼玉県および群馬県における出寄留および入寄留割合

第3表 明治17年埼玉県および群馬県における一人あたりの貸借金高および抵当流れ高

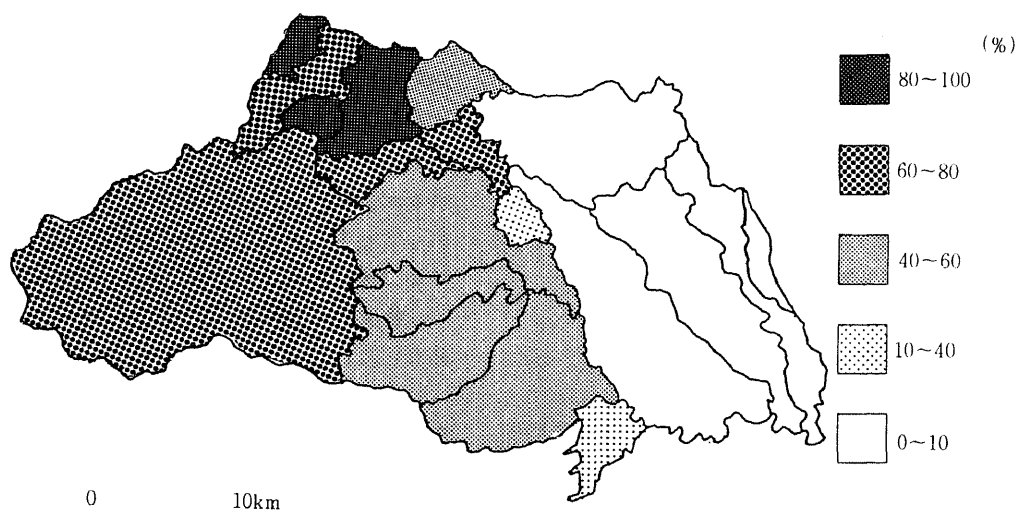
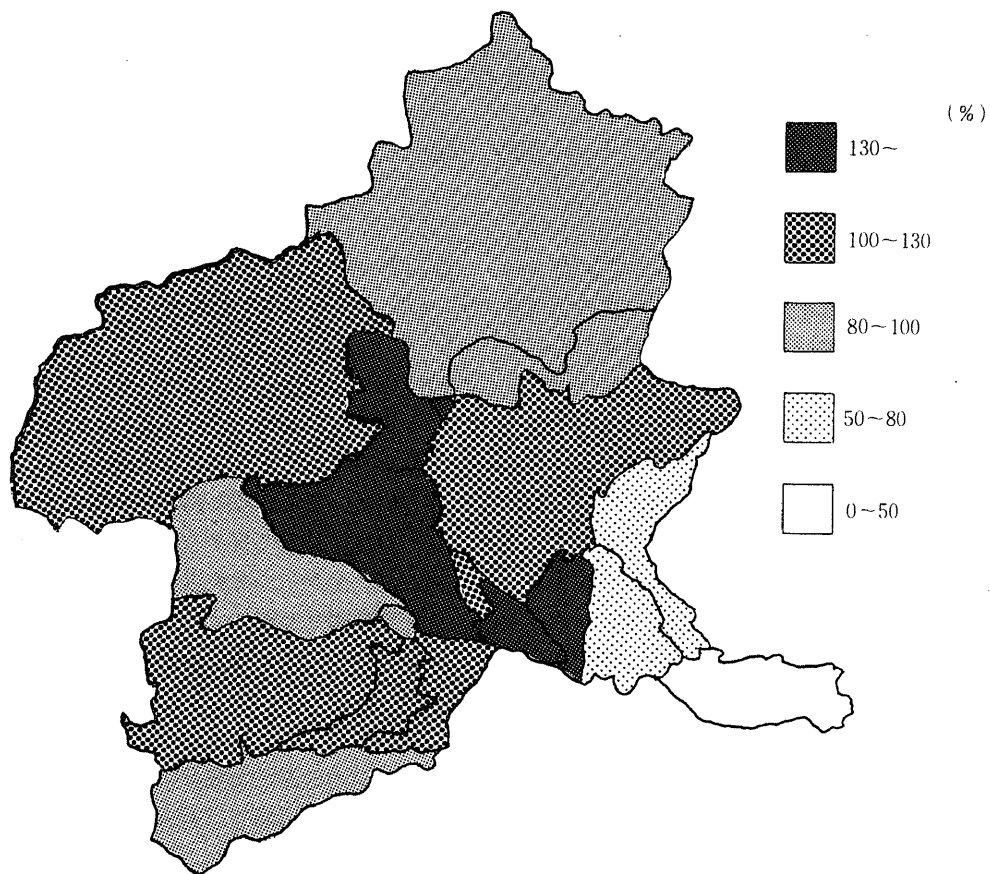
秩父郡の生産基盤

まず、明治前期における養蚕業の地域的展開の様相を第1図によりみてみよう。ここでは埼玉・群馬両県の明治17年の郡別養蚕農家戸数を指標とし、全農家戸数に対する割合を養蚕戸数率として示した。ただし、群馬県は養蚕農家を「一家ニシテ春夏秋蚕ヲ共養スルモノハ三家ト通算スル」としているために、埼玉県のそれと直接比較はできない。

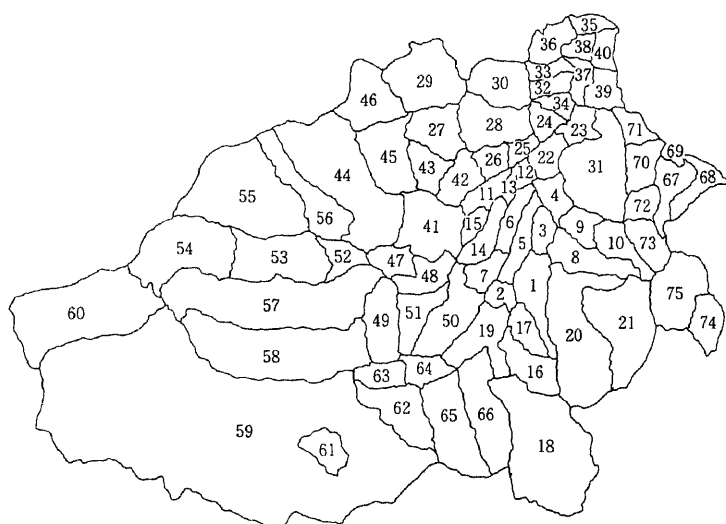
明治17年の埼玉県平均の養蚕戸数率は45%であるが、県内の養蚕地域は武蔵丘陵および秩父盆地を含む県西部に偏り、北埼玉郡以南の平野部はいずれも10%以下を示し、際だった対照をみせている。養蚕戸数率の県平均が103%となる群馬県では、西群馬郡およびその周辺の県央域で高い割合を示し、それは埼玉県北部の養蚕が盛んな地域と連続している。埼玉県内で養蚕戸数率の高い地域は、群馬県境に近い那珂郡の98%を最高に、賀美郡や榛沢郡があげられ、その数値は郡内のほとんどの農家が養蚕を営んでいたことを示している。秩父郡の養蚕戸数率も71%にのぼり、埼玉県内では上記3郡と男衾郡について5番目に高い割合を示している。一方、養蚕戸数については、秩父郡は10,256戸を数え、入間郡の10,546戸に次いで多い。秩父郡の養蚕農家戸数は県全体の約2割を占めていた。

つぎに、秩父郡内の人口および耕地面積からみた生産基盤の地域的特徴を検討しよう。第3図には、明治20年(1887)の「町村編成区域表」から秩父郡内各村の1反あたりの人口密度を示した。「町村編成区域表」は翌年の市町村制施行に先立って

4



第1図 埼玉県及び群馬県の郡別養蚕戸数率



1 大宮郷	21 芦ヶ久保	41 下吉田	61 三峰
2 別所	22 皆野	42 久長	62 白久
3 大野原	23 下田野	43 阿熊	63 賛川
4 黒谷	24 金崎	44 上吉田	64 小野原
5 寺尾	25 大淵	45 岩間	65 日野
6 蒔田	26 野巻	46 大田部	66 上田野
7 田村郷	27 上日野沢	47 小鹿野	67 御堂
8 山田	28 下日野沢	48 下小鹿野	68 安戸
9 梶谷	29 矢納	49 伊豆沢	69 奥沢
10 定峰	30 金沢	50 長留	70 坂本
11 大田	31 三沢	51 般若	71 大内沢
12 小柱	32 本野上	52 飯田	72 皆谷
13 堀切	33 中野上	53 三山	73 白石
14 品沢	34 藤谷淵	54 河原沢	74 櫛平
15 伊古田	35 矢那瀬	55 藤倉	75 大野
16 上影森	36 野上下郷	56 日尾	
17 下影森	37 井戸	57 薄	
18 浦山	38 岩田	58 小森	
19 久那	39 風布	59 大滝	
20 横瀬	40 金尾	60 中津川	

第2図 秩父郡内各村名一覧(明治17年)

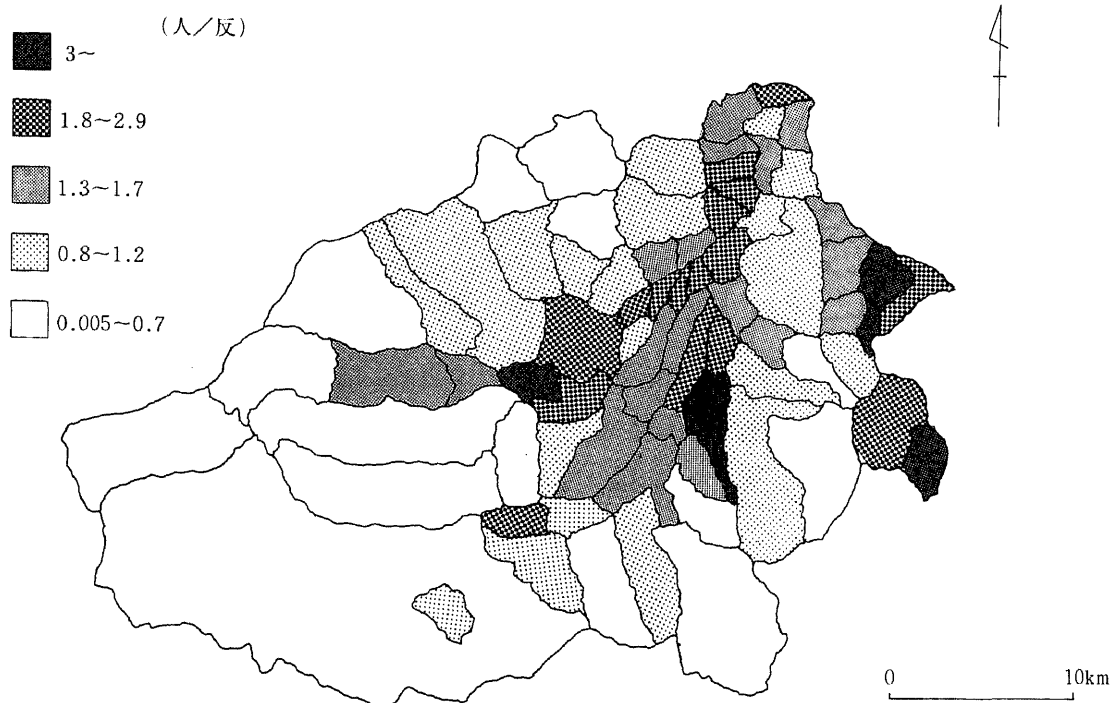
各町村が県に編纂提出した基礎資料の一つである(以下、第6図まで同資料を用いた)。この図によれば、江戸時代以来の町場を形成する小鹿野の4.8人、大宮の4.6人を突出した値として、それに次いで人口密度の高い村々は、荒川本流域、赤平川流域、そして両河川の合流域の河岸段丘平坦面を有する諸村であることがわかる。また、外秩父諸村(現在の秩父郡東秩父村および比企郡都幾川村)にあって、奥沢村(5.1人)御堂村(3.0人)など、高い人口密度を示している。これらは、後掲の田地比率の高さと深く関係していると思われる。なお、「町村編成区域表」による現住人口数は、大宮の4,271人を最高に、横瀬(2,805人)、下吉田(2,594人)、薄(2,553人)の順となっている。

第4図は、郡内各村の全面積に占める耕地の割合を表したものである。秩父郡全体では耕地面積の割合は22.8%であるが、平均以上の耕地面積比を示す村々は、1)大宮郷・大野原を中心とする荒川本流域諸村、2)小鹿野・下吉田を中心とする赤平川流域諸村、3)野上周辺諸村、に認められる。最も高い比率を示す小鹿野では61%、大宮では57%と、古くから耕地開発が進行していたことをうかがわせる。一方、荒川本流上流の大滝

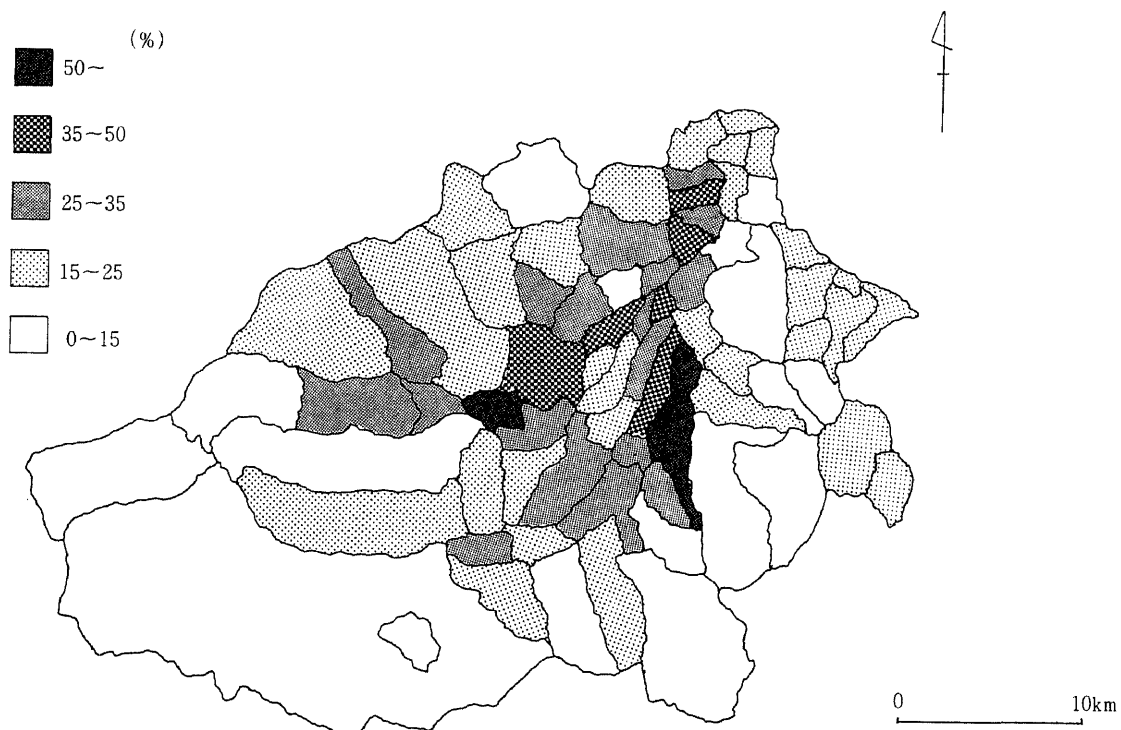
(0.7%)中津川(0.1%)、急傾斜地に立地する浦山(2.6%)や矢納(7.2%)などの村々は耕地面積がきわめて少ない。こうした耕地比率の地域構成は、先の第3図の人口密度のそれと似通った傾向にあり、人口支持力と土地生産力との強い関係を予想させる。

つぎに、耕地面積に占める田地比率を村別に示したのが第5図である。田地比率の郡全体の平均は7.9%と低い数値であり、つまり耕地の9割以上は畑地であることを示している。なかでも、秩父郡北部および西部の山間諸村は、田地が皆無、または0.1%以下とする村がほとんどである。他方、田地の割合が高い地域は、外秩父諸村と河岸段丘面上に広い平坦面を有する村々である。外秩父の槻川流域の御堂では田地が耕地の35%を占め、秩父郡内でもっとも高率であり、それに隣接する安戸でも31%を占めている。また、赤平川流域諸村のなかでも、広い段丘平坦面を大規模な溜池で灌漑していた太田(22%)や、条里地割の遺構を有する小鹿野(13%)など、田地比率の高い村々が認められる。

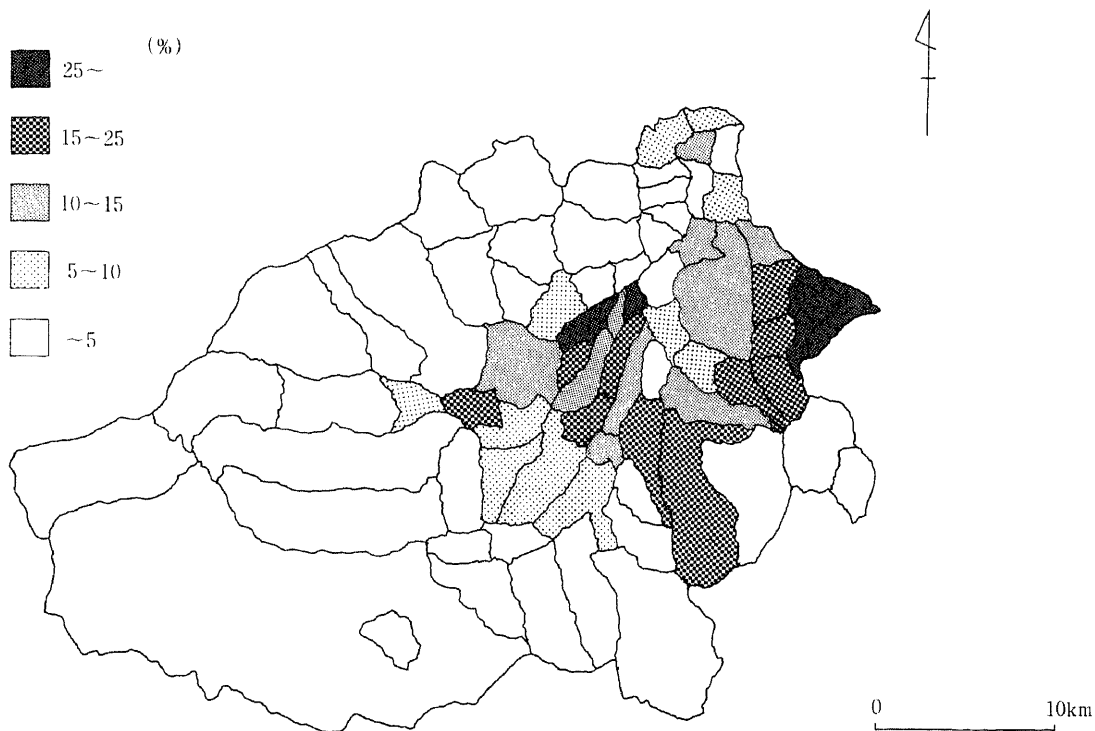
第6図は、秩父郡内各村の一人あたりの耕地面積をみたものである。秩父郡全体の平均は一人あ



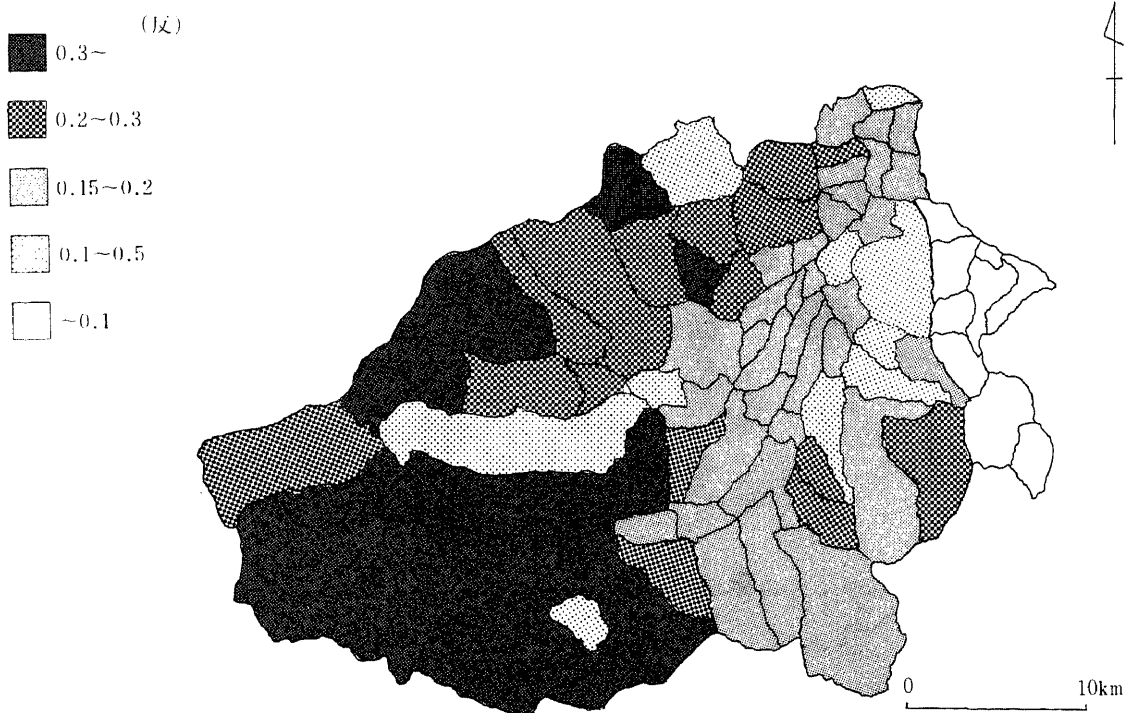
第3図 秩父郡内各村の人口密度(明治20年)



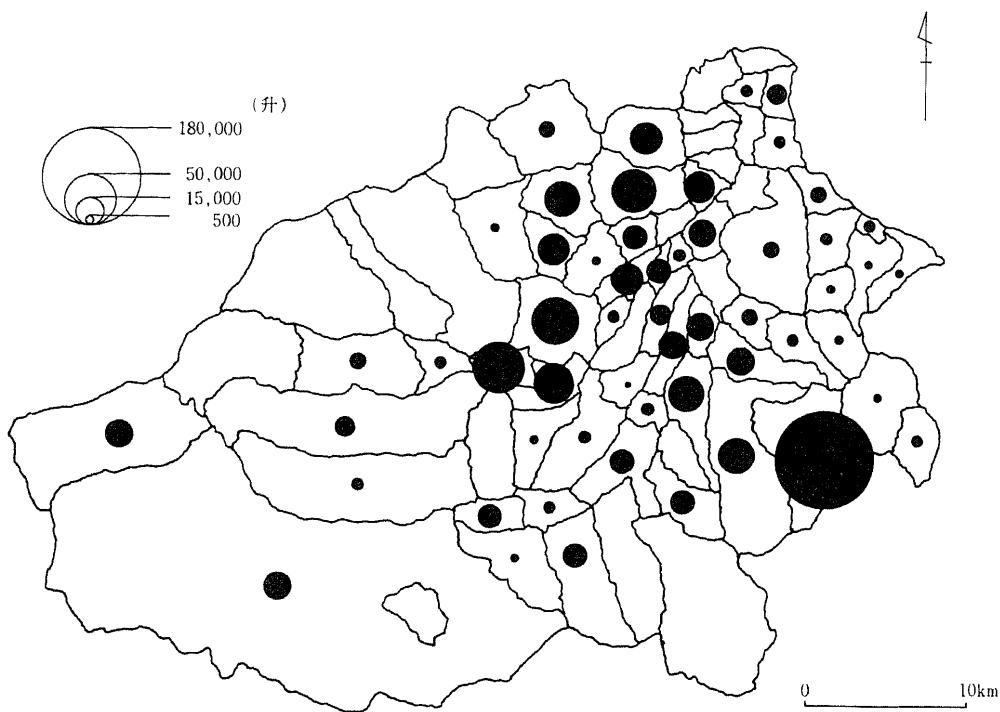
第4図 秩父郡内各村の耕地比率(明治20年)



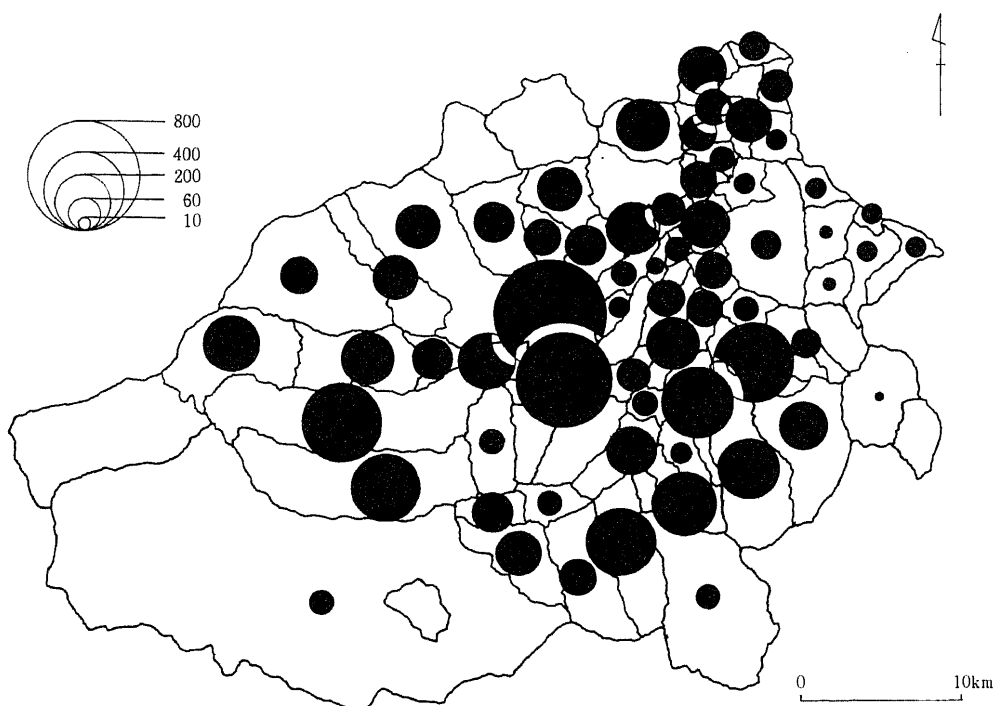
第5図 秩父郡内各村の耕地面積に占める田地比率(明治20年)



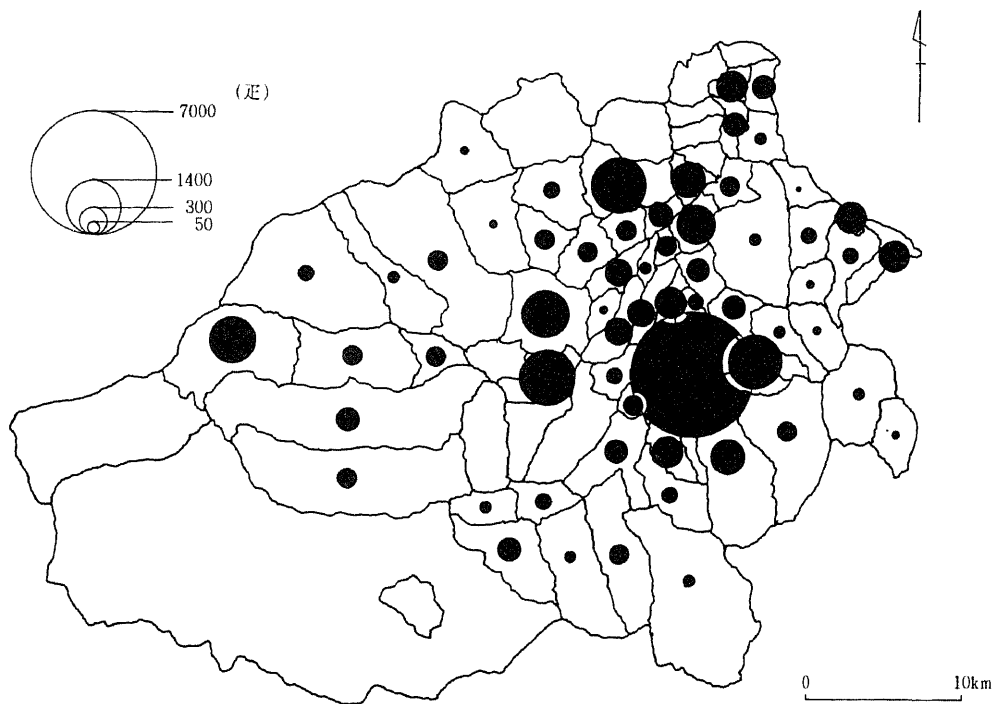
第6図 秩父郡内各村の一人あたりの耕地面積(明治20年)



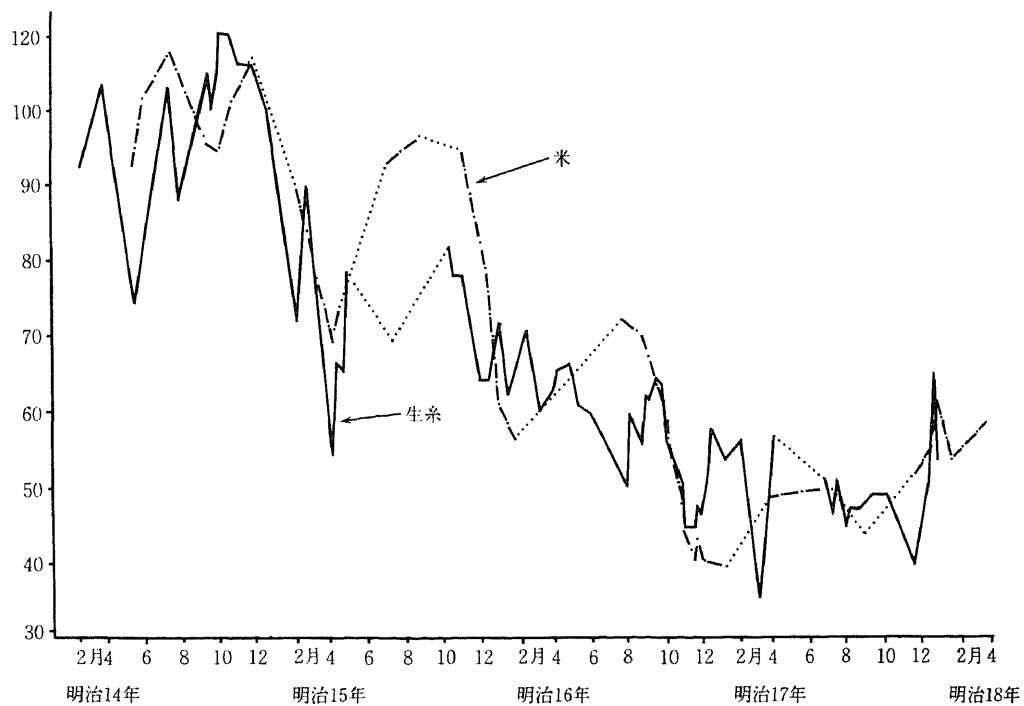
第7図 秩父郡内各村の繭生産量(明治9年)



第8図 秩父郡内各村の糸生産量(明治9年)
生産量は生糸・製糸・屑糸・太織糸の合計



第9図 秩父郡内各村の絹織物生産量(明治9年)



「木公堂日記」より作成

第10図 木公堂日記にみる生糸と米の価格変動
(明治14年平均を100とする米一石の価格と生糸百斤の価格)

第1表 明治17年における埼玉県及び群馬県の小作人率および小作地率

埼玉県			群馬県		
群 名	小作人率	小作地率	群 名	小作人率	小作地率
北足立	17.4	66.9	東群馬	7.6	26.1
新座	16.8	56.6	西群馬	10.7	30.0
入間	10.2	62.6	片岡	—	19.8
高麗	18.6	69.8	多胡	5.7	18.4
比企	10.8	28.0	緑野	7.6	19.3
横見	12.4	33.2	南甘楽	1.1	6.0
秩父	8.4	11.7	北甘楽	6.4	21.7
児玉	12.4	37.1	碓氷	8.6	16.4
賀美	10.8	28.1	吾妻	4.4	19.7
那珂	10.9	24.5	利根	4.5	27.6
大里	23.5	40.3	北勢多	2.7	22.2
膳羅	12.7	35.0	南勢多	6.0	23.6
棒沢	6.7	24.6	那波	11.5	22.9
男衾	8.4	25.2	佐位	16.4	31.8
北埼玉	11.1	38.1	新田	22.0	44.6
南埼玉	5.2	44.1	山田	19.7	61.2
北葛飾	27.3	40.9	邑楽	12.0	27.8
中葛飾	21.5	44.2			
平 均	13.6	39.5		10.0	27.5

単位 %

たり0.2町歩の耕地面積となるが、郡西部から北部にかけての山間部では0.3町以上の比較的高い数値を示しており、いずれも耕地面積に対して人口が過小で、焼畑耕作を含んだ粗放的な畑地利用のあり方を表している。逆に、外秩父諸村で0.1町以下の低い数値を示しているのは、水田耕作による集約的な耕地利用が展開していたことと対応すると考えられる。このほか、薄が0.19町と郡平均より低い数値を示していることは、同村内に雑種地が多く且つ多数の人口(2,553人)の存在、そして製糸業の展開による人口支持力の増加などが考えられる。また、山間部の村々の焼畑地では地目登記が山林と下々畑とで事例が混在しており、さらに今後の資料検討を必要とする。

秩父郡の繭・糸・絹織物生産

さて、つぎに『武蔵国郡村誌』の記載から明治9年の郡内各村の繭・糸・絹織物の生産状況をみよう。

第2表 明治17年埼玉県および群馬県における出寄留及び入寄留割合

埼玉県					群馬県				
	1/1現在 出寄留	1/1現在 入寄留	年間出寄留	年間入寄留		1/1現在 出寄留	1/1現在 入寄留	年間出寄留	年間入寄留
北足立	1.5	3.6	0.4	0.8	東群馬	9.1	15.7	7.0	12.4
新座	2.1	1.8	0.4	0.5	西群馬	2.8	4.8	3.2	4.3
入間	3.5	3.8	0.7	1.0	片岡	0.4	0.5	2.6	1.3
高麗	2.0	2.3	0.5	0.7	多胡	3.7	4.2	1.5	1.7
比企	1.5	1.7	0.3	0.4	緑野	4.1	5.9	2.1	2.2
横見	1.6	0.2	0.9	0.2	南甘楽	1.5	1.1	1.2	0.9
秩父	2.2	2.6	0.5	0.7	北甘楽	4.0	5.2	1.9	2.5
児玉	3.1	4.7	0.6	0.8	碓氷	2.6	5.6	2.9	3.5
賀美	3.6	1.9	0.9	0.5	吾妻	1.6	2.0	1.0	1.1
那珂	1.9	1.0	1.2	0.5	利根	1.7	3.1	1.4	1.5
大里	3.5	10.4	0.7	2.8	北勢多	2.0	2.3	0.6	0.9
膳羅	3.6	3.2	1.2	1.3	南勢多	1.7	3.2	2.6	2.5
棒沢	3.1	3.9	1.1	1.1	那波	3.2	2.9	1.6	1.4
男衾	2.3	1.2	1.5	0.5	佐位	4.8	7.8	2.0	2.1
北埼玉	4.2	2.0	0.4	0.1	新田	3.2	5.2	2.2	3.2
南埼玉	1.4	1.3	0.5	0.5	山田	4.5	6.9	4.0	3.6
北葛飾	1.2	0.9	0.4	0.3	邑楽	4.9	2.8	2.1	1.6
中葛飾	0.5	0.4	0.7	0.3					
平 均	2.38	2.61	0.72	0.72		3.28	4.66	2.35	2.75

単位 %

第3表 明治17年埼玉県および群馬県における一人あたりの貸借金高および抵当流れ高

埼玉県					群馬県				
郡名	貸借金高	書質入一受戻	貸借金高 ／人口	書質入一 受戻／人口	郡名	貸借金高	書質入一受戻	貸借金高 ／人口	書質入一 受戻／人口
北足立	1,281,399.5	324,343.5	7.84	1.98	東群馬	344,208.3	129,966.7	17.25	6.51
新座	262,570.0	69,527.8	12.54	3.34	西群馬	948,416.4	446,442.1	8.75	4.12
入間	699,804.7	255,382.2	5.58	2.04	片岡	9,944.1	11,944.0	3.19	3.84
高麗	178,781.6	131,578.4	4.55	3.35	多胡	103,472.1	33,998.4	9.38	3.08
比企	386,453.2	320,142.0	6.06	5.02	緑野	382,456.6	130,890.7	14.11	4.83
横見	55,848.3	11,514.5	4.62	0.45	南甘楽	103,275.7	54,791.0	10.77	5.71
秩父	341,134.4	192,264.3	5.09	2.87	北甘楽	598,011.1	196,354.0	10.76	3.53
児玉	247,831.5	144,865.4	8.40	4.91	碓氷	916,967.4	207,298.8	19.97	4.51
賀美	35,120.3	12,351.4	3.03	1.06	菅妻	220,679.1	169,210.1	5.76	4.42
那珂	24,642.4	11,233.5	3.71	1.69	利根	188,367.7	142,241.4	5.32	4.02
大里	676,464.8	148,514.3	23.97	5.26	北勢多	29,444.9	18,366.4	5.70	3.56
幡羅	540,740.9	106,928.9	17.53	3.47	南勢多	609,114.9	307,819.6	8.64	4.36
棒沢	880,087.0	161,205.0	21.46	3.93	那波	223,280.1	133,160.5	10.97	6.55
男衾	294,427.2	69,672.9	22.86	5.41	佐位	425,156.6	156,374.1	13.04	4.80
北埼玉	1,517,286.9	300,821.4	11.52	2.23	新田	280,899.4	153,885.0	6.40	3.51
南埼玉	554,675.9	84,981.3	4.60	0.70	山田	278,968.3	141,269.7	6.36	3.22
北葛飾	818,929.9	217,035.0	11.81	3.13	邑楽	453,805.8	238,679.8	6.94	3.65
中葛飾	222,397.8	36,454.3	16.60	2.72					
合計	9,018,596.3	2,598,816.1	10.70	3.00		6,116,468.5	2,672,692.3	9.61	4.20

単位 円

第7図には村別の繭生産量を示した。まず、生産量の多い村々についてみていくと、最高は芦ヶ久保の175,000升であり、次位の50,000升の小鹿野との間にも3倍以上のひらきがあり突出した値であることがしれる。また、秩父全体の繭生産量のおよそ4分の1にあたる生産量を芦ヶ久保が占めることになり、やや疑問が残る数値である。このほか繭生産量で上位にある村々は、下吉田(47,600升)や大宮郷(23,000升)の町場や、下日野沢(40,000升)・上日野沢(28,000升)、金沢(20,000升)や金崎(20,000升)など現在の皆野町域諸村の生産量の多さが注目される。他方、荒川上流域の河原沢や藤倉や日尾などでは繭生産量がなく、また、野上周辺にも生産皆無の村がいくつかある。

つぎに第8図では郡内村別の糸生産量を表した。ここでは村別書上のなかから生糸、製糸、屑糸、太織糸を合算して示した。この図によれば、下吉田の396貫を最高として、次いで下小鹿野の300貫、山田の207貫、薄の200貫の順となっている。糸においては郡内のほぼ全域で生産され、また、

際だって突出した村もみられない。ただし、前掲第4図の耕地比率の地域構成と比較してみると、浦山・上影森・日野や、薄・河原沢などの耕地比率が極めて小さな村々で糸の生産量が多いことが注意される。また、全体の分布的偏りも、繭に比べると、やや荒川本流域にその重心が移動しているように思われる。『武蔵国郡村誌』では糸の生産が全く報告されていない村としては、外秩父の白石や櫛平、北部の下日野沢・矢納・大田部などがあり、疑問の余地もあるが、その数は少ない。

第9図には絹織物の生産量の分布を示した。大宮郷が3,500疋と突出した生産量を示している点のみがまず注目される。それは秩父郡全体の生産量のおよそ3割に相当する。おそらく、大宮郷に次ぐ生産量は小鹿野であったと推測されるが、『武蔵国郡村誌』ではその生産量は無記載である。図中で大宮郷に次ぐのは、下小鹿野(700疋)、下日野沢(700疋)、山田(678疋)、河原沢(500疋)、下吉田(500疋)の村々である。秩父郡内のほとんどの村で絹織物生産はみられるものの、その多くは

200疋以下の少量である。全体的な分布の傾向は大宮郷を中心として山田・横瀬を含めた地域、赤平川流域では下吉田・下小鹿野の地域、皆野を中心とした荒川・赤平川合流域などが生産量の多い村々が密である。

つぎに明治10年代、松方デフレ期における秩父郡内の生糸の価格変動を物価動向との関係からみてみよう。第10図は、薄村の篤農家柴崎谷蔵³⁾が遺した『木公堂日記』から、米価と生糸価格の記載を明治14年(1881)から明治18年(1885)の期間から抽出した。生糸価格は郡内5ヵ所の市場における相場と考えられる。この図によれば、生糸価格は明治14年から明治17年にかけておよそ3分の1に下落している。とくに明治14年10月から明治15年4月までの半年間では価格は半分に減少している。柴崎谷蔵がその日記において「諸色下ル」と頻繁に記すように、この価格低落はとくに生糸に限ったことではなかった。図中の米価に注目すると、この期間、米価は生糸価格の変動とはほぼ軌を一にしていることがわかる。つまり、松方デフレ期の物価下落のなかでのこの生糸価格の変動は特別なものではなく、全般的動向と言えよう。

秩父郡の農民層分解

一般に、松方デフレ政策の影響を強く受けた地域では小作地の割合が増大し、その結果農民層の両極的分解が加速されたと理解されてきた。さらに、秩父地方においては、明治11年(1878)の地方税規則の施行にともなう新規課税、および協議費の徴税に対する農家負担の増大が、明治17年(1884)の秩父事件を発生させた1つの要因とも考えられている⁴⁾。そこでつぎに、府県統計書から秩父郡の小作人率および小作地率、出入寄留人口比、地所書質入貸借金額について検討する。

まず、第1表は明治17年の埼玉・群馬両県の小作人率と小作地率を表したものである。同年の県平均の値は、埼玉県では小作人率13.6%、小作地率39.5%と、群馬県のそれより高い。秩父郡はその両県の平均値を下回り、小作人率8.4%、小作地率11.7%を示している。なかでも小作地率につ

いては、埼玉県内各郡のなかでは最も低く、10%台にあるのは秩父郡のみである。また、群馬県を含めても山間部の南甘楽郡(6.0%)に次いでおり、秩父郡の小作地率は特に低かったことがわかる。

第2表は明治17年における本籍人口に対する出寄留および入寄留人口の割合を埼玉・群馬両県について郡別にみたものである。現住人口調査の実施以前であるため、ここでの人口は本籍にもとづくものであるが、動態の地域的傾向をみるうえではある程度有効であろう。1月1日現在の数値は当該期間を含めた寄留人口比であり、年間寄留は年季契約の奉公人をはじめ長期的な滞留を含んでいるとみることができる。明治17年においては、出寄留・入寄留ともに埼玉県よりも群馬県のほうが平均において高く、年間の数値については群馬県は埼玉県の3倍以上を示している。このことは埼玉県に比べ群馬県が他所稼ぎの輩出・受入においてともに多いことを表すものであろうか。両県とも、出寄留に対して入寄留が超過している傾向にあるが、埼玉県の場合、1月1日現在の比率については出寄留比が入寄留比を上回る郡がやや多い。このなかであって、大里郡の3～4倍の入寄留比超過は突出した値でありやや例外的出があるが、そのほかの郡は1月1日現在入寄留比がおおよそ2～3%台、年間入寄留比はほとんどの郡で1%以下にある。秩父郡についても、同様に、1月1日現在と年間ともに入寄留比のほうがやや高い。

つぎに、地所の書質入貸借金額について郡別に表したのが第3表である。表中の貸借金高は地所を抵当にした貸借金額の年間総額であり、書質入から受戻を差し引いた金額は実際の抵当移動を表している。この表によれば、埼玉県内にあっては、一人あたりの抵当移動となった貸借金額は、丘陵部をしめる男衾・大里・比企の順で各郡とも5円以上と高い。秩父郡の2.87円という値は全18郡中9番目で、ほぼ平均的な位置にあるとみれる。受戻ができずに抵当となっていた地所が所有移動した割合はけっして高くはないのである。また、ここでは示してはいないが、質屋利用の状況に関し

でも、明治17年の秩父郡は年間質流れ金額こそ児玉郡について多いが、貸出金額・貸出口数に比べると、埼玉県全体の平均よりやや高い程度にすぎない。

以上にみた指標が示す秩父郡の状況からは、農民層分解がこの時期秩父において著しく進展していたとは言い難い。たしかに、明治前期の秩父郡の生糸生産は、下吉田・小鹿野・薄を中心として西秩父諸村が生産量で上位を占めるものの、秩父地方全域において重要な移出産品となっていたことが認められる。したがって、松方デフレ政策による物価下落が郡内の生糸生産農家に少なからず影響を与えたことに違いはないが、それは秩父地方に限定されるものではなかったと考えられる。

付 記

本報告の作成にあたって、筑波大学歴史地理学教室の石井英也先生、小口千明先生、岡村 治先生、

原田洋一郎先生には、常に暖かいご指導を頂きました。また図面の作成に関しては人文学類の学生の皆様にお手伝い頂きました。本報告は、1984年に筑波大学に提出した卒業論文「秩父事件の歴史地理学的研究」の資料の一部分をもとにし、新たにデータを加え作成したものである。卒業論文作成時には、黒崎千晴先生に終始ご指導を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

なお本報告は、埼玉県長期派遣教員の研修の一環として作成いたしました。

注および参考文献

- 1) 埼玉県編(1981):『新編埼玉県史別編 5 統計付録』, 埼玉県, 23~26。
- 2) 埼玉新聞社出版編(1976):『秩父事件史料 第3巻』, 埼玉新聞社出版局, 555~577。両神村大字薄小字大塩野, 加藤家文書。
- 3) 天保7年(1839)に三山村生まれの柴崎谷蔵は慶応3年から明治34年まで日記を遺している。
- 4) 金子兜太・中沢市朗(1977):秩父事件の新たな相貌(対談), 中沢市朗編『秩父困民党に生きた人びと』, 現代史出版会。